九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

明治期日本語訳聖書における訳語「悪魔」について

尊田, 佐紀子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9359

出版情報：語文研究. 91, pp.15-24, 2001-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

明治期日本語訳聖書における訳語「悪魔」について

尊　田　佐紀子

1．はじめに

1880年（明治13年）に『新約全書』（新約聖書）が、また1882年（明治15年）から1887年（明治20年）にかけて旧約聖書[注1]が出版された。これらの日本語訳聖書は1872年横浜で開催された教派合同の宣教師会議において企画されたものであり、「翻訳委員会訳」と呼ばれる日本語訳聖書である。

当時の聖書和訳業についての様子が、『福音新報』1088号所収の井深梶之助氏の談話「新約聖書の日本訳に就て」に詳しく述べられている。それによると、その翻訳委員はブラウン、ヘボン、グリーンであり、その補佐にそれぞれ高橋五郎、奥野昌綱、松山高吉があたっていた。

その訳業にあたって用いられた聖書が何であったかと言えば、井深氏の談話に「そのテーブルの上に開てある書物はブラオン氏とグリーン氏の前には二三種の希臘原文の聖書、ヘボン氏の前に英訳の新約註解書、日本人の前には文理や官話やその他の支那翻訳の聖書といふ風であつた様に記憶する」とあるように、ギリシア原典、英訳の注解書、文理訳・官話訳・その他の中国語訳聖書であった。

ギリシア原典はもとより、英語を母語とする委員たちが英訳を参考にするのは当然のことだが、中国語訳聖書がその場にあった、ということが、翻訳委員会訳の文体・語彙に大きな影響を与えている。井深氏の言う「文理や官話やその他の支那翻訳の聖書」とは、「代表訳」「ブリッジマン・カルバートソン訳（ＢＣ訳）[注2]」「官話訳」[注3]と呼ばれる中国語訳聖書であった。翻訳委員たちは、三種の中国語訳聖書のうち特に米国系のＢＣ訳を重視したと言われている[注4]。

実際、語彙の面から見ても、翻訳委員会と代表訳・ＢＣ訳では一致する語が多く、森岡健二氏の調査[注5]によれば語形が一致（または一部一致）する率は77.7％にのぼる[注6]。中でもキリスト教用語の一致率は高く、実際に「天使」「福音」「聖書」などといった用語は、翻訳委員会訳と代表訳・ＢＣ訳とで語形が一致している。

しかし、〈悪魔〉の翻訳に関しては代表訳（「魔鬼」）・ＢＣ訳（「魔鬼」）といった中国語訳聖書と、翻訳委員会訳（「悪魔」）では語形が一致していない[注7]。上述の〈天使〉などと違って、なぜ〈悪魔〉に関しては語形が異なっているのか。その背後にある文化的・宗教的背景を手がかりに、その理由を探っていきたい。

2．〈悪魔〉とは何か

〈悪魔〉とは何なのか、まずその概念を規定したい。はじめに述べておかねばならないのは、〈悪魔〉には、大きく分けて二つの性質があり、ギリシア原典においては、その二種類の〈悪魔〉はそれぞれ別の語であらわされていた、ということである。

まず一つめの〈悪魔〉の性質は〈人に取り憑き災いをもたらす悪しきたましい〉というものである。旧約聖書では、ヘブライ語 ruah ra'ah（悪霊）であり、全ての疾病、殊に精神的病苦は〈神から来る悪霊〉によるものと信じられてきた。

新約聖書においては、大部分は人にはいり人につく悪霊、これがギリシア語 daimonion（神々と人類の間を取り持つ霊のこと）、pneuma poneron（邪悪な霊）、またはakathartos pneuma（汚れた霊）という語であらわされる〈悪魔〉であった。生理的または精神的な種々の疾病は、しばしば悪霊によるものとされている。〈憑かれる〉というのは、悪霊の力の下にあるという意味で、種々の疾病に悩まされるとは、悪霊が肉体に入り人に憑いて疾病で悩ますことであり、それを癒すとは悪霊を追い出すことであった。すなわち、人に取り憑き災いをもたらす悪しきたましい、という性質を持った〈悪霊としての悪魔〉、それが〈悪魔〉の重要な一つの特質であった。

二つめの〈悪魔〉は、「悪」の起源の不可解さと神秘さを説明するために生じた観念であり、誘惑者、虚言者、という性質を持った〈悪魔〉である。新約聖書ではdiabolos（非難者、中傷者という意味を持つ）とされた。

この性質の起源は、世界を善神と悪神、光と闇との闘争の場とみる古代ペルシア宗教の神話論的二元論にあるとされる。この二元論が原始キリスト教に影響して、神の光に満ちた創造世界に対抗する攪乱的要素、世界破壊原理をサタン(注8)およびその使者デーモンたちと見る表象が発生した。例えばアダムの堕罪は、蛇という表象で言い表される〈悪魔〉の誘惑と教唆によるもの、と解釈される。

つまりは、〈悪を表現し正しい道からの堕落を誘惑する悪魔〉、これが〈悪魔〉の二つ目の重要な特質なのである。

ただし、この二種類の〈悪魔〉は、欽定英語訳聖書 King James Version (KJV)(注9)においてはすでに混同されていた。例えば、マタイ4章第1節の〈悪を表現し正しい道からの堕落を誘惑する悪魔〉diabolos が、KJV ではdevil と訳されているが、ルカ11章第14節の〈悪霊としての悪魔〉daimonion も、KJV では devil と訳されている。すでに西欧において二種類の〈悪魔〉が混同されていたことは明らかである。

3．翻訳委員会訳における二種類の〈悪魔〉

翻訳委員会訳では、〈悪を表現し正しい道からの堕落を誘惑する悪魔〉は「悪魔(あくま)」

(「偖イエス聖霊に導かれ悪魔に（diabolos）試みられん為に野に往り」（マタイ4章第1節））、〈悪霊としての悪魔〉は「悪鬼」（イエス瘖唖なる悪鬼を逐出しけるに悪鬼（daimonion）いでゝ瘖ものいひしかば人々駭けり」（ルカ11章第14節））とギリシア語原典に忠実に訳出されている。

それでは、中国語訳聖書ではどうだったのだろう。翻訳委員会訳の席上にあった代表訳・ＢＣ訳ともに、〈悪を表現し正しい道からの堕落を誘惑する悪魔〉は「魔鬼」（「聖神引耶蘇適野、見試於魔鬼（diabolos）」（代表訳・マタイ４章第１節）、「當時、耶蘇被聖霊導之適野、致見試於魔鬼（diabolos）」（ＢＣ訳・同））、〈悪霊としての悪魔〉は「鬼」（「耶蘇逐瘖鬼、鬼（daimonion）出、瘖者言、衆奇之」（代表訳・ルカ11章第14節）、「耶蘇逐一鬼、乃瘖者、鬼（daimonion）既出、瘖衆奇之」（ＢＣ訳・同）」）としている。

席上にあったギリシア原典・英訳注解書・中国語訳聖書、そのうち、二種類の〈悪魔〉をそれぞれ別の語で表していたのはギリシア原典と中国語訳聖書であった。〈悪魔〉に関しては、訳語が混同されていた英訳ではなく、ギリシア原典・中国語訳聖書[注10]の翻訳方針に従ったと見られる。

４．訳語「悪鬼」について

翻訳委員会訳で〈悪霊としての悪魔〉が「悪鬼」とされた理由を探るには、ＢＣ訳・代表訳の翻訳方針を考えてみるとよい。

「鬼」という字は、もともと「死人のたましい、祭られた死人の幽魂」という意味を持ち、確かに〈たましい〉という点で、〈悪霊としての悪魔〉と共通点を持つが、より詳細な理由を探るためには、マタイ12章第43節における〈悪霊としての悪魔〉をめぐる訳語を検証する必要がある。中国語訳聖書では、「邪神（akathartos pneuma）離人、遊行旱地、求安不得曰」（代表訳）、「夫汚鬼（akathartos pneuma）既離人、遊於旱地、求安不得」（ＢＣ訳）となっていた。

代表訳・ＢＣ訳がそれぞれ訳語「邪神」「汚鬼」を採用した理由には、プロテスタント中国語訳聖書における用語問題（ターム・クエスチョン）が関わっている。[注11]代表訳の共同事業が決議されて以降、主にtheos とpneuma の訳語をめぐって、「上帝」「（聖）神」を主張するロンドン伝道会のメドハースト、レッグらと、「神」「（聖）霊」を主張する米国長老会のラウリー、米国聖公会のブーンらとの間で、所謂ターム・クエスチョン（用語問題）の論争が繰り広げられた。

pneuma の訳語に「神」を用いれば、（「神」は悪霊や汚れた霊の訳にも用いることができるので）マタイ12章第43節のakathartos pneumaを「邪神」と訳すことができる。これがメドハーストの意見であり、代表訳ではメドハーストの意見を採用してこの〈悪霊としての悪魔〉を「邪神」と訳している。

一方、ゴダード（代表委員を脱会している）が1847年に発表した考察に

pneuma の翻訳に対する意見が見られた。彼は「風」「鬼」「霊」のうち、どの語が最もpneuma とよく対応するかを検討し、「霊」は、pneuma に完全に一致しているとはいえないが、幾つかの重要な類似点があるのでpneuma には「霊」を用いるのが良く、「鬼」は人の死後の霊(注12)及び他の霊的存在を表すのに用いられるが、それ自体に下等で堕落の観念を含んでいる、と述べた。つまり、当該部分(〈悪霊〉)のような場合は(「霊」は善良・卓越のような良い意味しか持たないので)「霊」を用いることができず、「汚鬼」のように「鬼」を用いるのが妥当だということになる。ＢＣ訳はゴダードの主張と同じくpneuma を「霊」とし、akathartos pneuma のような〈悪霊としての悪魔〉には、「汚鬼」のように「鬼」を用いている。

日本での聖書和訳業においては、翻訳委員会はＢＣ訳の翻訳方針を踏襲して、theos を「神」、pneuma を「霊」とし、akathartos pneuma のような〈悪霊〉の時は「悪鬼」としている(注13)。また、この場合「鬼」を用いた理由については、翻訳委員会の中心であったヘボンに手による『和英語林集成』初版（1868）和英の部では「ONI オニ A devil, demon. Syn. MA.」であるが、第二版（1872）では「ONI オニ A devil, demon, fiend, the spirit of one dead, a ghost; also an epithet for a powerful or bad man.」となり、the spirits of one dead（死んだものの霊魂）が加えられていることがその裏付けとなろう。

つまり、横浜の教派合同の宣教師会議が開催され、日本語訳聖書の出版が企画された1872年の段階で、ヘボンは「鬼」＝「死んだものの霊魂」という知識、前述のゴダードの「鬼」に関する見解と同様の知識を持ち始めていたのである。

ただし、〈悪霊としての悪魔〉を訳すとき、ＢＣ訳ではdaimonion は「鬼」、akathartos pneuma は「汚鬼」と、訳語を一定させていないが、翻訳委員会訳ではdaimonion もakathartos pneuma も「悪鬼」とし、一つの訳語に統一している。その点において、翻訳委員会訳は、ＢＣ訳の翻訳方針を踏襲しながらも、ＢＣ訳よりも〈悪霊としての悪魔〉の訳語を統一しようとする意識が強かったものと思われる。

5．訳語「悪魔」について

明治期の新漢語創出に大きな役割を果たした英華字典類は、翻訳委員会訳が訳語「悪魔」を採用した経緯には関係していない。なぜなら、日本への影響が大きかった以下の三字典とも、「魔鬼」は採用しているが、「悪魔」はどの字典も採用していないからである。

（Ｒ・モリソン英華字典（1820））

・DEVIL, is by the Mahomedans called 魔首; Seduced by the devil, 被

魔之誘; Devils, or bad celestical spirits, 天鬼; These opposed the deification of Sacya Budh.

- DEMON, 鬼, expressed by an evil spirit, 悪神; 魔鬼; 邪神; 悪鬼; 狂悖的悪神

（メドハースト英華字典（1847））

- DEMON　鬼、魔、天怪、魔鬼、邪神、悪鬼、汚神、鬼魅（後略）
- DEVIL　魔鬼、悪鬼、邪鬼（後略）

（ロプシャイド英華字典（1866－7））

- Demon, 鬼、魔鬼、邪神、鬼怪、妖精、汚神、悪鬼; the chief of demons, 鬼魁; demon and spirits, 鬼神
- Devil, an evil spirit or being, 鬼、魔鬼、悪鬼、邪鬼; the chief of the devils, 鬼魁、鬼頭

もともと「悪魔」という語は仏典語（パーリ語 māra、サンスクリット語 māra（魔羅））であり、〈仏道を妨げる一切の悪神、仏に敵対する鬼神〉のことであった。最初期仏教において、『相応部』経典中の「悪魔相応（パーリ語 māra - saṁyuttaṁ）」の中に悪魔の古い物語が収められている。

この「悪魔相応」中に、悪魔波旬が世尊波羅奈（パーラナシー）に「汝は天と人との／悪魔の係蹄にかゝれり。／汝は悪魔の縄にて縛られぬ。／沙門よ、汝は未だ我より免れじ」と語り、世尊が「我は天と人との／悪魔の係蹄より脱れぬ。／我は悪魔の縛より脱れぬ。／破壊者よ、汝は敗れたり」と答える場面がある。(注14)

悪魔は「破壊者」と呼ばれ、世尊を堕落へと誘惑しようとしている。この〈破壊者〉〈堕落への誘惑〉という点において、〈悪を表現し正しい道からの堕落を誘惑する悪魔〉と共通点を持っていた。

また、漢訳の仏典においても、東晋の帛尸梨蜜多羅訳の仏典「仏説灌頂経」に、仏陀のことばとして「使我来世摧伏悪魔及外道」とあり、māra の漢訳語「悪魔」が仏に敵対し降伏される存在となっている。

日本に目を転じると、まず『梁塵秘抄』に「不動明王恐しや、怒れる姿に剣を持ち、索を下げ、後に火焔燃へ上るとかやな、前には悪魔寄せじとて降魔の相」（巻第二　仏歌十二首）(注15)とあり、悪魔は仏に敵対する存在として書かれている。

また、謡曲『調伏曽我』にも「東方降三世明王は、降三世明王は、青蓮の眦(注16)に、悪魔を降伏して、壇上に翔り給へば」(注17)とあり、日本において仏教的な文脈で用いられていた仏典語「悪魔」は、日本においても仏道からの引き離しを企む存在であり、神への信仰からの引き離しを企むキリスト教の悪魔と同様の役割を担っていたため、翻訳委員会訳では〈悪を表現し正しい道からの堕落を誘惑する悪魔〉に「悪魔」という訳語を採用したのだと思われる。

しかしなぜ「魔鬼」という中国語訳をそのまま採用せずに、訳語「悪魔」を採用したのだろうか。翻訳委員会訳は、二種類の〈悪魔〉を原典に忠実に訳出していた。そのため、〈悪を表現し正しい道からの堕落を誘惑する悪魔〉を中国語訳聖書に倣って「魔鬼」とすれば、どちらの〈悪魔〉も「鬼」字を含むことになり、二種類の悪魔がともに「鬼（たましい）」という共通点を持つような誤解を生むおそれがある。その混同を避けるために、中国語訳聖書の「魔鬼」を採用せずに、日本にあった仏典語「悪魔」を訳語として採用したのだろう。(注18) この点において、〈悪を表現し正しい道からの堕落を誘惑する悪魔〉をも「鬼」字を含む訳語「魔鬼」を採用した中国語訳聖書とは一線を画している。

また、「魔鬼」よりも「悪魔」が日本人には分かり易いと判断した面もあろう。例えば、ヘボン・ブラウン訳と呼ばれる聖書(注19)では「さて耶蘇　あくまにこゝろミられんために　聖霊(ミたま)に　野(の)にミちびかれり」（マタイ４章第１節）のように、「悪魔」が仮名で書かれている。また翻訳委員会訳以前に翻訳された中村正直の『西国立志編』（明治４年出版）には「魔鬼(あくま)ノ会堂ト為ルベキナリ」(注20)と、「魔鬼」に「あくま」とルビが振られている。

そこには、日本人には「魔鬼」は分かりにくく、「悪魔」は分かりやすいという両者の意識がうかがえる。だからこそヘボンは自らの私訳聖書で「あくま」と仮名を使うことができ、中村は（おそらくロプシャイドの字典を参考にした）「魔鬼」という語に、日本人に馴染み易い「あくま」というルビを振らなければならなかったのである。

馴染み易い語、という観点から考えると、翻訳委員会訳以前の日本語訳聖書で〈悪魔〉の訳語として採用されていた「鬼（おに）」がある。翻訳委員会訳で二種類の〈悪魔〉が原典に忠実に訳出されていたことは前述したが、それ以前の日本語訳聖書においては、以下のように二種類の〈悪魔〉はともに「鬼（おに）」と訳されてきた。

（ギュツラフ訳(注21)・ヨハネ13章第２節）

- フルマ井ドキニ、アニ(注22)（daimonion）ハ　カリヨト□ニン　ユダズシモンノハラニハイデ　ガノヒトハ　ヱズゝヲ　ツゲタイ

（ベッテルハイム訳(注23)・ヨハネ13章第２節）

- ユウバンナテカラ　ヲニ（daimonion）ヤ　ヨダス　イシカリヨテ　スマンガク

（ゴーブル訳(注24)・マタイ４章１節）

- さて　イエス　おに（diabolos）ゝ　そゝのかさるゝ　やうに　のべゑ　ミたまに　さそわれ　たまふた

また、ギュツラフとベッテルハイムが参考にし、ヘボンも見たことのある（手沢本あり）メドハーストによる語彙集『英和和英字彙』（1830）にも「Devil. O-ni. ヲニ」とある。

もともと日本の鬼は、仏教の影響によって凶悪で威嚇の表情を積極的に持ち始めた。馬場あき子氏によれば[注25]、日本において鬼が造形化されていくのは、仏教の影響もあるが、「鬼門（艮）に居座するゆえ」という語呂合わせ的俗説も考えられる、と言う。「かみ」「おに」の居所としては、民俗学では海の彼方や山のむこうに、一種の異郷を想定している。陰陽道では艮の隅（東北）を魔神の出入する方向としているが、これは鬼星のある方向でもあり、陰湿な北東の風〈鬼北〉と呼ばれる風の吹く方向である。この艮の方向を、牛と虎の要素より造形されてゆく鬼の塑像の原因にあてた俗説は、たぶんに結果論的ではあるが、おそらく貴重この上ない虎皮の美への瞠目と、それをまとう者が持つであろう圧倒的な力への空想がなさしめたものとしておもしろい、との説が説かれている[注26]。

また、『訓蒙図彙』[注27]に「鬼（き）」の図が掲載されているが（図参照）、この図については和田正路の随筆『異説まち〳〵』（寛延元年（1748）八月奥書）に、「鬼の絵に虎の皮の腰あてを書く事、古法眼元信よりと云。訓蒙図彙にあり。絵は土佐風也。鬼の体着たるものなど別のもの也。今では夜叉といふも、獄卒といふも混じたるやう也。」[注28]とある。

『異説まち〳〵』の説の真偽のほどを確かめるすべは今はないが、仏教の影響や「艮」からの連想、また『山海経』からの影響などによって、鬼がだんだんと『訓蒙図彙』にあるような姿に造形化されていった、と考えて良いようである。

すなわち、日本では、鬼は上述のような様々な過程を経て造形化されていったものであり、当然日本人には非常に馴染み深い（もしかすると仏教における「悪魔」以上に）ものであった。

それにも関わらず、ヘボンは翻訳委員会訳では〈悪魔〉を「鬼（オニ）」とは訳さなかった[注29]。なぜなのか、その理由を探るには、プロテスタント主義の聖書に対する態度を考慮に入れるのが有効である。

プロテスタントは、〈信仰のみ〉という原理を持つ。その原理はすなわち聖書

のみ（sola scripta）の原理に通ずる。そうすると〈悪魔〉は、聖書に書かれた〈悪魔〉のみが真実であって、民間の迷信と〈悪魔〉を結びつけることは、プロテスタント主義に基づけば大きな過ちとなるのである。

時代を通してさまざまなものと結びついて造形化されてゆき、日本人にとって想像（image）しやすかった鬼、それをプロテスタントの「聖書のみ」という原理に照らして考えると、日本で「鬼」を〈悪魔〉の訳語として採用するのは著しく不適当だったのである。(注30)

6．おわりに

翻訳委員会訳は、二種類の〈悪魔〉をギリシア原典に忠実に訳出し、それぞれの〈悪魔〉の持つ性質を考慮した上で「悪鬼」「悪魔」という訳語を選定した。二種類の〈悪魔〉の性質の混同を避け、より日本人に分かりやすくするために中国語訳聖書の「魔鬼」はしりぞけられ、かつ、プロテスタントが持つ「聖書のみ」の原理に照らして「鬼」はしりぞけられたのである。それはキリスト教における〈悪魔〉のとらえ方、また、翻訳者自身の宗教的背景、さらに日本の文化的背景などが複雑に絡み合って訳語採用が行われた結果であった、と言えよう。

翻訳語の問題の本質は、このように様々な要素を複合的に考えなくては見えてこない。本稿では、このような個別的検証を行うことによって、その本質の一端をわずかながら示したつもりである。

注 1　旧約聖書は、複数の人間による分担翻訳という形をとり、『旧約聖書　創世記』（明治16年）『旧約聖書　詩編』（明治19年）等と分冊出版された。

2　「代表訳」「ＢＣ訳」のあらましについては土岐健治「邦訳聖書の源流としての漢訳聖書」（『月刊しにか』９月号、1993）に詳しい。1843年、英米各宣教師会（教派）の宣教師の代表たち（delegates）の共同作業による従来の中国語訳聖書に代わる新たな聖書改訳が企画され、1852年に「新約全書」が完成、「代表訳」（The Delegate's version）と呼ばれた。しかし、この過程で、まずバプテスト派の代表（委員）が辞任し、次いで、英国系と米国系の委員がtheosとpneumaの訳語を巡って対立し、いったんは妥協が成立したが、結局英国系委員と米国系委員は分裂し、英国系は1854年に「旧約全書」を刊行、米国系は1859年に新たな「新約全書」を、1862－3年に「旧約全書」を発行した。この米国系委員による翻訳が、訳業の中心的役割を担ったブリッジマンとカルバートソン二名の名により「ブリッジマン－カルバートソン訳（ＢＣ訳）」と呼ばれることになる。

3　代表訳・ＢＣ訳は「文理訳（Wenli）」と総称されるが、翻訳委員会訳で参照されたのは北京官話による「官話訳（Mandalin）」で、シェレシェフスキーの手による。その「新約全書」は1866年ないし８年頃完成、「旧約全書」は1874年にそれぞれ完成して出版された（合本は1878年）。本稿では官話訳は参照していない。

4　川島第二郎「初期の日本語訳聖書と中国語訳聖書」（『月刊しにか』11月号、1993）に

よる。

5　森岡健二編『近代語の成立・明治期語彙編』(1964、明治書院）中「新約聖書の和訳」による。

6　ただし、森岡氏の調査ではＢＣ訳と翻訳委員会訳のみが調査の対象で、他の中国語訳聖書は参照されていない。

7　ただし、翻訳委員会訳は全ての〈悪魔〉を「悪魔」と訳したわけではなく、中国語訳聖書も全てを「魔鬼」と訳したわけではない。その理由については後述する。

8　ただし、ヘブライ語のsatan はもともと「敵対者」以上の意味は持たなかったが、紀元前三百年以前に旧約聖書がギリシア語に訳された時、ヘブライ語 satan をギリシア語 diabolos に置き換えたアレクサンドリアのユダヤ人たちによって混同が始まった。

9　イギリスの国王ジェームス一世が54人の学者を集めて翻訳にあたらせた英訳聖書である。７年の歳月をかけ1611年に出版された。

10　〈悪霊としての悪魔〉の翻訳に関しては、中国語訳聖書のうちＢＣ訳の翻訳方針を踏襲していた。詳しくは後述。

11　鈴木広光「漢訳聖書におけるpneuma の翻訳について」(『キリスト教史学』49、1995)による。

12　〈悪霊としての悪魔〉の訳語だったギリシア語 daimonion は、もともと死んだ英雄の霊を表すことが多かった。

13　「悪鬼（akathartos pneuma）人より出て旱たる地を巡り安息を求れども得ずして曰けるハ」(マタイ12章第43節)

14　日本語訳は『南伝大蔵経』第十二巻相応部経典一による。

15　本文は新日本古典文学大系56『梁塵秘抄　閑吟集・狂言歌謡』による。

16　青い蓮華は仏眼の喩え。

17　本文は日本古典文学大系41『謡曲集　下』による。

18　しかし、日本には、取り憑いた悪霊を取り除くためのまじない「悪魔祓い」があった。例えば近松の浄瑠璃「出世景清」(貞享２年（1685）初演）に、小野姫が父である大宮司と夫の景清の無事を祈り、魔除けに弓を取る場面に「悪魔祓へと取る弓の」という表現があるし、噺本にも「悪魔祓」という噺（安永６年（1777）正月刊「春俗」）がある。また、「厄払」が唱える文句の中にも「イカナル悪魔ガ来ルトモ此厄払ガヒツトラヘ」という言い回しがあった。つまり日本の「悪魔」には「悪霊」という意味もあったのである。すなわち、〈悪を表現し正しい道からの堕落を誘惑する悪魔〉を「鬼」字を含まない「悪魔」と訳しても、日本人が二種類の〈悪魔〉の性質を混同してしまうという可能性は残っていた。

19　『新約聖書馬太伝』。ヘボン、Ｓ・Ｒ・ブラウンが、バラ、タムソンらの協力を得た訳業を、前者の二人が完成させたものである。この『新約聖書馬太伝』は1873年に東京で刊行された。この作業は、ヘボンとブラウンはそれぞれ日本人教師に中国語訳聖書の書き下し文を作らせることから始まった。その際、代表訳とＢＣ訳が参照されたが、書き下し文の底本となったのはＢＣ訳である。中国語訳聖書への依存度は、文体・用字とも極めて高い。

20　九州大学附属図書館蔵『西国立志編』(明治10年出版）による。

21　『約翰福音之伝』。この書の翻訳は、ギュツラフによって1836年にマカオで尾張出身の三人の無学な漂流漁民相手に始められた。彼らは漢文を読めなかったし、ギュツラフ

自身も彼らから日本語を学んだ程度では、中国語訳聖書の書き下し文を作ることは出来なかった。訳語にも中国語訳聖書の影響を明確に見出せない。

22　アニ→ヲニか？

23　琉球訳『約翰伝福音書』。1847年訳了、1851年香港で出版。ベッテルハイムによる。

24　『摩太伝福音書』。1871年東京で出版。ゴーブルによる。ゴーブルはアメリカバプテスト派宣教師。彼は1862年日本人助手に、同じアメリカバプテスト派のゴダードの訳による中国語訳聖書『聖経新遺詔全書』（ゴダード訳と呼ばれる）の書き下し文を作らせた。この影響は平仮名分かち書きを主にした俗語訳の本書にも、文章、用字の上に多く見られる。ＢＣ訳も、ヘボンらとの対抗上参照されている。

25　馬場あき子『鬼の研究』（ちくま文庫、1988、筑摩書房）による。

26　また馬場氏は、鬼の造形化に寄与したその他の要因として、『山海経』にあらわれる獣皮をまとった山の主神を挙げている。

27　『近世文学資料類従　参考文献編４　訓蒙図彙』所収の複製による。

28　本文は『日本随筆大成　第九巻』による。

29　しかし『和英語林集成』では、すべての版で〈悪魔〉の日本語訳に「オニ」を採用している。聖書とは違って、辞書では多様な訳語を提示したのだと思われる。

30　また、日本の鬼が持つ性質自体が〈悪魔〉と異なっていた、という意見がルーサー・リンク『悪魔』（高山宏訳、1963、研究社）の訳者によって述べられている。「なるほどさまざまな種類の鬼はいるが（中略）第一すべての鬼が悪の存在でもない。それから鬼のどんな物語や絵、彫刻を見ても、仏陀を表す善き力に戦いを挑む鬼という表現はない。これらを考えてみると、日本で言う「鬼」が悪魔に当る存在ではないことは歴然としている。」（『悪魔』「日本の読者のために」中より）

（そんだ　さきこ・本学大学院博士後期課程）